

2013. 7. 6



追悼 — 3人の名演奏家を偲ぶ

パイヤール
シュタルケル
C・デイヴィス



プログラム

今年4月に入って、名演奏家の訃報が相次ぎました。14日にイギリス出身の名指揮者コリン・デイヴィスが85歳で、翌15日にはフランス出身の名指揮者パイヤールが85歳で亡くなり、28日にはハンガリー出身の名チェリスト、シュタルケルが88歳でこの世を去りました。今日は残されたライブ音源を聴きながら3人の名演奏家を偲びたいと思います。

コリン・デイヴィス (1927.9.25~2013.4.14) はロイヤル・オペラ音楽監督、バイエルン放送響首席指揮者、ドレスデン国立管名誉指揮者、ロンドン響音楽監督等を歴任。バルビローリ以降最も成功したイギリス人指揮者でした。デイヴィスの指揮は得意とするエルガーやブリテン等お国物の素晴らしさは勿論、ドイツ物、ロシア物等どんな作品でも真摯に向き合った純音楽的な質の高い演奏を聴かせてくれました。

ジャン・フランソワ・パイヤール (1928.4.12~2013.4.15) は世界的なバロック音楽ブームの先陣的役割を果たした名指揮者で、明るく柔らかい響きは美しさに満ち溢れ、落ち着いて聴ける心地良さがありました。バロックだけでなく、ハイドンやモーツァルトにも優れた演奏を聴かせましたが、その後はドビュッシー、オネゲルといった近、現代音楽にまでレパートリーを拡げ、独自のスタイルで魅了し続けました。

ヤーノシュ・シュタルケル (1924.7.5~2013.4.28) は1950年ピリオド盤に録音された難曲、コダーイの無伴奏チェロ・ソナタを楽々と弾き切り“松やにの飛散のような音”と評されたことで、一躍有名になりました。テクニクだけが強調されがちですが、今回お聴き頂く特にバッハでは、生き生きとした推進力と生命力に溢れた演奏を聴く事が出来ます。シュタルケル本来の素晴らしさはこんなところにあったのだと思います。

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):
音楽の捧げものBWV.1079~6声のリチェルカーレ

ホアキン・ロドリーゴ (1902~1999):

アランフェス協奏曲~ 第1楽章、第2楽章、第3楽章から

山下和仁(ギター)/ジャン・フランソワ・パイヤール指揮パイヤール室内管弦楽団
(1987.11.2 サントリーホールでのLive)

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904):

チェロ協奏曲短調op.104 ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章から

ヤーノシュ・シュタルケル(チェロ)

アンドラーシュ・コロディ指揮ブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団
(1983.2.3 昭和女子大学人見記念講堂でのLive)

*** 休憩 ***

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):

無伴奏チェロ組曲第3番ハ長調BWV.1009~

プレリュード、サラバンド、フーレ、ジーク

ヤーノシュ・シュタルケル(チェロ)

(1994.5.24 カサルスホールでのLive)

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト (1756~1791):

セレナード第6番ニ長調K.239“セレナータ・ノットウルト”

コリン・デイヴィス指揮ドレスデン国立管弦楽団

(2012.5.15 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

フェリックス・メンデルスゾーン (1809~1847):

交響曲第3番イ短調op.56“スコットランド”~

第1楽章、第2楽章から、第3楽章から、第4楽章

コリン・デイヴィス指揮バイエルン放送交響楽団

(1995.1.20 ミュンヘン、ヘルクレスサールでのLive)